

---

# 人魚姫

庵あん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

人魚姫

### 【ISBN】

97829314

### 【作者名】

庵あん

### 【あらすじ】

その恋は、苦汁と共に味わうのが常道かもしねない。

エメラルドグリーンの海面に、冷たい人魚の肌を想つた。

深海に生息する、その魚じみた人種の体温は、恐らく僕たちよりも遙かに低いのだろう。そして、その肉は苦塩と合わせて味わうのが常道かもしれない。白い脱体を乗せる大きなテーブルの上には、銀の食器と白ワインを添えよう。

ふと、塩素の匂いが強くなる。鼻をつく厭な匂い。海水を浄化して使用しているこの水は、決して人形の住まう場所のそれではない。では、僕の視線の先で、尾鰭を伸ばして優雅に泳ぐあれは、何と呼べばいいのだろうか。

水面にその美しい幻想の影が横切つた。

コバルトブルーの水中を泳ぐ、人魚に僕は声を掛ける。碧い海面から、青い光に濡れそぼつたプールサイドへと浮上する彼女の脚には魚じみた鱗も鰓もない。しかし、艶やかに白い躯に纏わりつく、濡れた黒い髪は海藻めいていた。

彼女と付き合い始めたのは二ヶ月前。

最初に声をかけたのは、どちらだつただろうか。四方を、そして、頭上までもを水槽が覆う、そんな蒼に微睡むアクアリウムの中で、それは御伽噺みたく、うたかたの様な、曖昧な時間だつた。

そう、まさに幻想的な。

周りを囲む水の蒼さに僕は狂わされていたのかもしれない。或いは、蒼を映した彼女の瞳に取り憑かれて仕舞つたのか。非現実の中で出会つた大人の雰囲気を持つた女性に……。否、もしかしたら、蒼を宿した瞳の奥、その深海に潜む人魚姫に魅入られたのかもしない。

そう、あの時間はこの室内プールの、プールサイドよりも青かつたのだ。それは溶けるように。

「あの、何か飲みますか？」

「いい。少し寒いの」

「それなら、少し休みましょう」

「そうね」

初めは、年下の彼氏もいいものね、と思っていた。  
けれど、それも幻想。ひとときの猶予。

現実という地上は、私にとって息苦しくて堪らない。それなら、  
ずっと理想という海中に沈んでいたいと嘆いていた。腐った海藻の  
様に絡みついてくる人間関係も、ヘドロの様に堆積している日々の  
ストレスも存在しない、海底へ。

水族館へ足を運んだのも、そんな息の詰まる日常から逃げ出した  
かつたからだ。

そんなときに出逢った彼が私に溺れているのが、今は救いかしら。  
プールサイドで無邪気に笑う彼の笑顔に、ときめくこともある。ベ  
ッドの中で子供みたく甘えてくる彼にも。彼の、一途で純粋なところ  
が愛おしい。

王子様とは、かくあるべきだ。

今は、これなら地上も悪くないわね、と思つている。

そんな年下の彼の異変に気がついたのは、残業終わりで息苦しさ  
に耐えながら帰路についている時だつた。あの時、振り返らなければ良かつた。ネオンに色めく街の、銀色に光る魚の群みみたいな雜踏  
の中。私よりも若い女を連れて歩く彼の後ろ姿を見つけたのが始ま

り。

その頃から、彼が私を「デート」に誘つことが少なくなった。私の部屋に来ることも少なくなった。仕事が忙しいという、何とも在り来たりな理由。お姫様を退屈にさせる、王子様の悪いところ。何となく、彼が離れていくような、手の届かない場所に行つてしまふ様な、そんな気がした。否、それは根拠の無い確信だったのかかもしれない。

でも、その確信は時間の経過で、搖るぎないものに変わつてゆく。そのとき、すべては幻想なのかも知れないとthoughtた。

或いは、御伽噺

「最近、忙しいの？ 仕事」

「はい。大事な仕事を任せられちゃつて」

「そう。大変ね」

「すみません。寂しい思いさせてしまつて……

「いいのよ。仕方ないもの」

そう、寂しそうに呴く彼女の首筋にキスをする。彼女の口から、甘い吐息が漏れた。それは泡となつて、海面へと浮上する。髪と香水の匂いに酔いそうだ。やはり、人魚なんてものは幻想だつた。否、現実に、本当に存在するのかも知れない。しかし、地上で生きる男は、同じく地上の女に惹かれてしまうものだ。そして、幸せな家庭を築くのが人間だらう。

人魚なんて、遊びでいい。

きっと、それは御伽噺のようなものなのだろう。結末はいつも泡沫の夢。仄かな潮の香りを残して、岸部に打ち付けて消えて仕舞う、波の様に。或いは、人の記憶の様に。

それはそれは、白く、はかない、夢なのでした。

そう思つこともできた。そうすべきだつた。彼にとつて私は年上の女なのだから。そういう？潔さ？は必要だつた。覚悟していたつもりだつた。

けれど、どうしても、許せなかつた。

その純粹な瞳に騙された私は愚か者。年上のくせに一途で馬鹿な女。そう思われているのだとしたら……。単に、からかわれているだけだとしたら。弄ばれているだけだとしたら。本気じやなかつたら。

全部、溺れた振りだつたとしたら。

深海から浮上する泡の様に膨張する感情が私の中で、弾けた。黒い水面に映る自分の顔を見つめながら、もう押さえられない憤慨と憎しみに震えている。

これが最後の確認だ。

「ねえ、約束。覚えてる？」

「約束？ 何の？」

「……ううん。何でもないわ

「そうですか

人の口約束なんてものに、未来を左右するような力は存在しない。彼女の年齢なら、そんなことくらいは知つていて当たり前だろうと思つていた。

人魚とは、意外と純粹な生き物かもしない。

だからこそ、人魚なのだろうか。叶わぬ恋に消えた。一途で、愚かな女。

そんなことを考えながら、まだ湯気の立つコーヒーに口をつける。これから触れる人魚の冷たい肌の感触を思い浮かべて。その脚に更に冷たい鱗が存在しないのが、残念ではあつたが。しかし、その黒い苦汁を飲み干したところで、強い睡魔に襲われた。意識が海底へ引き込まれていく。

何かおかしい。

暗い深海へと沈んでいく視界の中で、人魚の横顔が幽かに笑つた。

「ウソついたら針千本の一ます」

セイレンの歌声に導かれるように、視界が浮上する。  
否、舵をとられた。

霧の様に朦朧とする意識の中での、身体を動かすことができなくなつていてることに気がついた時には、全てが終わっていたのかもしれない。椅子に縛り付けられている。目の前に彼女がいた。

彼女の瞳に、何より深い憎悪を垣間見た。凍り付く。

サルガツソーの、怨念の藻屑に捕まつたようだつた。

にこやかに。微笑みながら、彼女は硝子のグラスを僕の目の前にかざす。大量の縫い針が入つたグラス。それは、無機的な蛍光灯の光の中でも、太陽に恋をする海面みたく、キラキラと光を乱反射している。

一瞬、その無数の針が喉に突き刺さる様を想像した。それはきっ

と、灼けつくような痛みだらつ。  
性質の悪い夢だと思った。

「ねえ、飲んで？」

「そんなことできるわけ」

「飲みなさいよ。嘘、ついたわよね？」

「嘘？ 何を……。何のことですか」

「ねえ、飲んで。裏切ったのはあなた。当然の罰でしょ？？」

「そんな……。だからって」

「飲みなさいよー」

「む、無理です……」

「あら、指切りの方がいいかしら？」

「もう、やめてくださいー！」

これは人魚を怒らせた罰なのかも知れない。

美しいが故に、嫉妬深い生き物なのだ。だから、深海に幽閉されているのかもしれない。

否、もっと恐ろしい生き物だらう。その人魚の見る夢が踏み入れてはならない幻影めいた深い霧だ。その中で舵を離せば、たちまち、

御伽噺の中の魔物たちに襲われ、船は波に呑み込まれて仕舞う。

人魚というのは

灯台の下、防波堤の先端。テトラポットの傍から黒い海へ。かつて愛した人間を棄てる。流れ出る赤い血をバスルームで洗い流した時、すべては泡沫と消えてしまったのかしら。真っ赤な泡となつて、紅いさざなみと搔き消えて。すべて、質の悪い夢だったのかもしれない。

夢の様な、白く、儂い泡沫。

随分と長い間、その泡を見つめていたように感じる。すっかり、夜の闇を海面は映してしまっていた。太陽に愛されて輝く海も、太陽が居なくなれば、途端に黒い水。

それこそ、御伽噺の様なものなのでしょう。

潮騒の中でテトラポットに座る人魚姫は、恋人に別れのキスをして。

最後に残った王子様の首を海へ投げ入れた。それは泡となつて、何もかも、消えてゆく。夢に微睡み、波間に猶予う、泡沫のように。

人魚姫

The Sadistic Love Song

是にて、了。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8293y/>

---

人魚姫

2011年11月24日19時52分発行